

古本屋の戦後

“忘れ得ぬ人々”

鳥山将平



ぬ人々”であった。正篇から続篇へ読み進んで行つて、新しい世界が展開されて行くことになった。アンカットのフランス装の手触りが今も懐かしい。

昭和二十九年の秋、一人のベレー帽の青年が市バスに乗って、名古屋古書組合の市場に向つていった。丁度乗り合わせた歌人の本屋が目止めて、あるいは同業かといふかたつたという。予感のとおり、二人は相次いで同じ市場へ足を運んだのであるが、これが私の古本屋第一歩であった。自分では古本屋の雰囲気を感じていたとは考えられないのだが……。

父が突然死んで以来手伝つていた家業の味噌屋から、商売の水に馴染み切れず、三年足らずで離れることになった。もともと理科系の学生で学徒動員で結核にやられ、足掛け六年ばかり、病院と大学の間を往來しているうち、徹しい理学の先端からはとり残され、鬱屈として脇道の方へ向いてゆくのだつた。その時に座右の書となつたのが辰野隆さんの「忘れ得

折の人生に灯った小さな明りだったかも知れない。

なまぬるい性分で、つとめてキチンとした店を設計する甲斐性もなく、資金も友人の助けをかりてデモシカ本屋が始まることになった。しもた屋の玄関を利用し間口一間奥行き一間半、棚は手作り、毎日格子戸を外し外の戸板に雑誌を並べて開店ということになる。応援にかけつけてくれた院展の先生がのれんを手染してくれたたり、文字通りみんなに支えられての店開きだった。

こうして古書市場の初日、A書店の一手引きで、序列の厳しかった先輩方にも引き合わせて貰い、古本屋の生活が始まったのだつた。当時はセリの市だったから、Aの大きな声と熱意は他を圧倒していたし、不屈の意志で永年の間一日も市を休むことがなかったと思う。私もあやかうと心掛けたが段々市に馴染んでゆくのであった。

ある日紙の悪い本の山の中から、山代巴さんの「落のとう」を見付けた時は、心臓が本当に高く鳴った。どの雑誌だったか初出の時に読んで感動を覚えていたもので、この本は当時の赤松俊子さんの装画なのも嬉しい。それから文

庫の「原爆の図」へ、又中井正一さんの「美学入門」へと、私のきつやかな銭にならない書物探求が広がってゆくのであった。

昭和三十三年の秋、大府から岡崎へ移つて来た。街の中心には近いものの、一筋脇へ入った場所、五坪程の小さな店である。先輩の書店主が、表通りに看板を出さなくてとは忠告してくれたが遂にそのまゝ、来る人は来てくれるだろうと居直つたまゝに過ぎてしまつた。その頃漸く業界も落付いて来ていて、戦後華やかな一時期、戦前からの店と引揚者旧軍人等々、岡崎だけで三十軒ほどあった店が十数軒(西三河全域で二十数軒)になつていった。尾張と三河とは両つの国のお国振りの違いから別々の組合を作り、三河は名古屋の商圏に飲み込まれまいと肘を張つているという状態であつた。

昭和三十三年にはじめて岡崎で大市を開いたが、その後は東三河と西三河と協力し合つて交互に大市を開くようになり数年続けた。これが市会の活性化や組合の明朗化につながつていったように思う。しかし地方の月例の市は低調で、専ら名古屋の市場にたよる事になつていったが、そこに集つた異色が豊橋の冬日書房、刈谷の西村

書房と私との三人組、二人は吹き荒れたレッドパージの風をくらつて本屋を始め、私はシンパ。心情において通ずるものがあつたのか、顔を合わせた時から太い絆で結ばれることになり、三河の三人ということとでさんさん会がはじまつたのであつた。

昭和三十五年の安保騒動の時から学生運動のたけなわの頃、私の店も学生自治会の分室の趣を呈していたものだった。その頃の学生達は誰がどんな卒論を書いているのかも解つていて、資料探しに手を貸したことも懐かしい。その頃の卒業生たちは今も近くに來るときつと寄つてくれる。

昭和四十一年になつて、さんさん会でまた目録をはじめようかというこゝで「古本あらかると」を出しはじめた。三年程の間に反戦平和、フランス文学とその周辺、雑誌特輯、編年戦後文学などテーマ別に十三号までを発行した。うちでタイプ印刷を始めたのもこの頃で、はじめは目録を作ろうと思つた訳だったが、障害者の働く場としてふくらんでいつて、次第に母屋をとられるような格好にもなつて来てしまつた。あらかると十四号が出なかつたのは、他の仕事に追われて延び延びになつてい



る内に、原稿の手直しをしなくてはならなくなるし、やがて冬日書房の事故死によって中断してしまった。返す返す済まない事をしただけだ。

印刷の方は労音の機関誌とか地方の歌誌、句誌、また大学関係の紀要など、手がけた仕事はずっと引き続きやらせて貰い、お蔭で従業員たちも勤続のベテランとなつて来、安心して任せておける様にはなつて来ていた。私は本屋を止める心算は毛頭なく、細々とでも古本屋ですと言いつつ来て来たが、二足の草鞋は互に引張りあつていたのかも知れない。結局どちらも成績を上げていない。見廻してみ

ると、古本屋の盛業は店を守る奥方の功が大きいのを痛感するが、私のところはカミさんの外助によつて支えられていたと言える。ひそかに感謝したいと思つてゐる。

先に触れた地方の大都市については、身近かに範となつたのが岐阜の納涼市会であつた。毎年の夏大都市の大都市を避けて行われたこの市は、B書店の人脈とアイデアに彩られた楽しい市だつた。「市場敵憎さにもくし懐かし」の名句が、当時のアットホームで厳しい雰囲気を与えて心に残つてゐる。こゝで書肆ユリイカの本と嬉しい出会いがあつて、そのリストを作

りかけた。80%ほどには達しただろうが、伊達氏自身の「ユリイカ抄」が刊行されて反故。序に言えばハーバート・リードの邦訳書誌に気を付けているのだが、地方にいては本に接する機会も少く、日暮るるに途はるか遠しと観念してゐる。

先年三河地域史研究会で、三河の本及び本屋について話をしなくてはならなくなつた。近藤恒次氏の本などを引張り出してお茶をにごしたのだが、愛大の田崎先生から「これらの本にみな目を通したか」と聞かれて、赤面せざるを得なかつた。どうも中途半端なことしかしてゐないようである。

西三河の組合も発展を重ね、組合員も四十名余を数え、毎年春秋の二回大きな市も出来るようになった。和やかな結束の固い組合である。

昭和五十七年から組合の補助で「ふるほん西三河」を発行するようになった。有志の販売目録集の頭に三頁ばかりの小文を付けたものの、小文を付けることはさんさん会の当時からの想いが実つたものである。季刊で休みなく五十号に達しようとしているが、全国からの暖いご支援があつて永続性をしているのである。多くの方々から

主にこの地方の人及び書物に関わる原稿をいただいていて有難く、特に森銃三氏、安部公房氏について等、貴重な資料であつた。時々原稿が切れると四苦八苦の勉強を迫られ、杜撰なものをお目にかけてゐる。本文の出版書目、大竹博吉氏の著作目録など、いずれ改訂増補しなくてはならない。小店の目録を見返してみると雑本が多く、これも自分の素顔をさらけ出しているのだと覚悟をきめてゐるのである。振り返ってみれば、小

は小なりに小を守つてきたことが、期せずしてささやかな自由を保つてこられた所以なのであらう。

本を売つて生業としてゐる以上、本は売らねばならぬ。大体自分の好きな本を売つてゐるので、心の片隅に、本を売りたいという本心がのぞいてゐる。現実には客と話が弾み気が合えば、結局秘蔵の本も見せ手放すことが多い。客それぞれが持つてゐる文庫をより充実するのが本屋の仕事であらうが、せつない業である。自分の文庫も持ちたいというのは鳥潜がましい事なのだろう。このわがまを残すかぎり、所詮素人商人の域を離れることが出来ないのが解つていて止められない。永年に亘つ

てこれを温かく許して来てくれた顧客たち、また仲間たちがいることを有難く思つてゐる。

AB両先達のことは少ししか触れられなかったが、戦前に小僧から叩き上げて、この道一筋に貫いた人々である。地方に在つて目立たないけれど、立派な業績をあげておられる。二人ながら類いまれな一徹さとおし、一挙一投がいまも私達の上に尾を曳いてゐる。それでいて外面には出さぬように努め、自分では「俺は腹を立てないぞ、頑固ではないぞ」と言い張つておられる。奥様は大変だろうと思う。二人とも現在現役を離れ、悠々と本の世界に遊んでおられるようである。二人に本の話、本屋の話是非書き残して欲しいと思つてゐるのだが、頑として応じて頂けない。私がこんなものを書いてしまつて、両先達から、苦が笑いで叱られるのが目に見えるようである。



(岡崎 桃山書房)